

「宅配便です。お届け物二点、社判でお願い出来ますか」

「はい、今行きます！」

今日は運がいい。

ちょうど資料を取りに行こうとした時に呼び鈴が鳴り、小走りで荷物を受け取りに行つた。

扉を開けた瞬間にぶわりと熱気が流れ込む。

うっすらと汗を滲ませた宅配員のお兄さんを見て、今日が猛暑日なことを思い出した。

「ありがとうございます。重いんで、俺運びますよ」

「ご苦労様です！ いえいえそんな、大丈夫ですよ……っわ、ととっ」

どうやら紙類が入っていたらしい。見かけによらず重い段ボールを持ち上げて、入口の段差を上げる瞬間によろめいてしまった。

やば、転ぶかも———と思った背中を、逞しい二の腕に支えられた。

「あ、ありがとうございます、ごめんなさい……!」

「いえ、俺こそ触ってしまつてすみません。大丈夫ですか」

遠慮がちにすぐ離れていった腕は、私が持った段ボールをスツと抱えていった。案内するのを待っているかのような視線を向けられて心臓が高鳴る。

厚意に甘え、印刷室の近くの柵まで運んでもらった。

「こんなところまでありがとうございます、重かったでしょう?」

「全然。むしろ、涼しい所に居られてラッキーでした」

照れた様子で一言添えてくれる彼に思わず笑顔が零れる。

深く頭を下げ、走って車に戻る姿を見送った。

(……今日も、格好良かったなあ)

青いポロシャツが精悍な顔立ちによく似合う。

背が高くて、二の腕が逞しくて、荷物を渡す時はいつも丁寧に、慎重に渡してくれる。そんな宅配員の彼が、私の「推し」だ。

密かに推していた
宅配員のイケメンが

熱中症で倒れかけて
いたので介抱したら
まさかの激重感情
抱えられてて

**甘く激しく
口説かれ**

ながらおまんことろとろにされちゃった話

ろこもいっしょさき
絢辻 透

「……え、付き合ってる？」

「えっ、ええ！？ そんなわけないでしょ……！」

同僚の篠原梨花さん——梨花ちゃんが、通りがかりに何かを察したらしくドアの向こうで待ち構えていた。

なんだかいつもよりにやにやしている。

「だって、なんか二人とも照れ臭そうな顔して歩いてるんだもん。高校生カップルかって」

「に、荷物が重かったから運んでもらってただけ！」

「ふーん？　じゃあ、後ろ姿見つめてうっとりしてたのは？」

「そ、そこまで見てたの……！？　それは……なんていうか、お、推しだから……！」
「推し……？」

思わず頬に熱がこもる。

急ぎ足で席に戻ろうとすると、梨花ちゃんはどこか納得の行っていないさそうな顔をしな

がら追ってくる。……席が隣だから仕方がないのだが。

「そうそう、だからその、今日も推しが尊いって思ってただけで……」

「え〜？ 確かに顔は格好いいと思うけどさあ、アイドルじゃないんだから」

「アイドルじゃなくなつて推してもいいでしょ。……そういうのじゃないの、ほんとに」
「でもあのお兄さん、運ぶ間ずっと春海のこと見てたよ。一回連絡先渡してみたら？」

「やめてってばあ……！ 私なんか絶対無理に決まってるんだから……も、もうこの話終わりっ。ほら、お仕事戻ろ……！」

納得の行かない顔のままこちらを見る梨花ちゃんの背中を押して席に戻す。

渋々ながら仕事に戻つたらしい。何か書き始めた梨花ちゃんの様子を見てほっとする。

——こんな、スタイルも良くない、顔も格好も地味な冴えない眼鏡の事務員に、あんな格好いい人が相手してくれる訳がない。

見ていたのは案内していたからだだろう。

そう思って仕事に戻ろうとした矢先だった。

「春海、出来たよ。次会った時これ渡しなよ」

「……!？」　り、梨花ちゃんのばかつ、こんなの絶対無理に決まってるでしょ……!」

「いつも配達ありがとうございます　今度もし良かったら二人で会いませんか？　連絡待ってます♡　岡崎より」

私の連絡先とそんなメッセージが書かれた紙を渡された。

すぐさま畳んでポケットに隠す。

絶対イケるのに、とむすくれる梨花ちゃんに、気持ちだけ貰っておくから！　と同じポケットに入っていた飴を交換するように渡しておく。

飴をもらって気が済んだのか、今度こそ仕事に戻ったようだった。

(だ、誰にも見られない場所で……家で捨てなきゃ……っ)

流石に書いた本人の前でシュレッターにかけるわけにはいかない。こっそりと決心して

仕事に戻った。

……二人で、ご飯に行けたら。

そういうことを、考えたことがない訳じゃない。一緒に映画に行ったり、美味しいランチを食べたり、帰りに手を、繋いだり……。

そんなことが出来たら、どんなに幸せだろう。

でも実際は、私みたいなのから連絡先を貰ったってただ困るだけだろう。

妄想は妄想だ。きちんと気持ちに区切りをつけて推しとの距離を保たないと。

改めて自分自身にそう言い聞かせ、今日中に終わらせなければいけない入力の仕事に戻った。

(やーっと終わった……。……そういえば最近、雨降ってないなあ。戸締りついでに、生垣にお水あげよっと)

思ったより作業が長引き、夏だというのに外が暗くなってしまった。久々に私が最終退出者になりそうだ。

戸締りついでに外の生垣にお水をあげようと思い、ホースを取り出して裏口から外に出た。

もう暗いの嫌になるほど蒸し暑い。

外壁の水道にホースを繋いで、生垣に水を撒いた時だった。

「うお、っ……」

「……え!？」

聞き覚えのある声があった。よく見ると生垣の向こう側に人影が見えて、さっと血の気が引く。

……絶対に水をかけてしまった。

慌ててホースを置き裏門から出ると、そこには生垣の角に座り、水を滴らせる私の「推し」の姿があった。

「す、すみません!! 大丈夫ですか!？」

「いえ、すみません、俺こそ。こんな所で休んでしまつて」

「うわあびしょびしょ……! ごめんなさい本当にっ……、……?」

頭から滴る水に申し訳なさが募るが、同時に気づいてしまった。
生垣の縁に座っている彼の顔色が、どうみても悪い。

頬は赤いがそれ以外は青白い。目の焦点もどこか合っていない。

——これは、よくない。

「大丈夫です、むしろ涼しくて気持ち良いくらいで……」

「お兄さん、来て下さい。顔色悪いです、中でタオルお渡ししますから、拭きながら少し休んでいてください」

「そんな……ちょっと、ふらついただけなので」

「それなら尚更ちゃんと涼しい所で休まないとダメですよ……！　もうフロアには私しかいないですし……お仕事、もう終わってらっしゃるんですよね？」

素直に頷く姿を見て、少し強引だけど腕を取って立ち上がらせた。

私服姿だ、恐らくは仕事の後に症状を認識したのだろう。腕を引っ張って裏口から誘導する。

入口の監視カメラには映っているが、もし何か言われたら「人命救助です」で通してやる。

そう思いながら、少し狭いが一番涼しい資料室へと彼を連れて行った。

「あ……涼しいですね、この部屋」

「でしょう？　エアコン効率いいんです、ここ。タオル持ってくるので、座ってか休んで下さいね」

そう言い残しドアを閉める。

あちこち駆け回って、うちわとタオルと保冷剤、それと緊急時用の経口補水液なんかも

発見した。応急処置としては十分だろう。あとはできれば横になれたほうがいいだろうから、資料室にあるパイプ椅子でベッドを作って……。

考えを巡らせながら資料室まで続く廊下を急ぎ足で駆けていく。

——本当に申し訳ないことをしてしまったけれど、体調が悪いところを発見できてよかった。推しには常に、健やかにいてもらいたい。

「あ、あああの……ほっ、本当にこれで、いいんですか……!?!」
「はい、これがいいです」

十分後、あれほど冷静に処置の支度をしていたのが嘘みたいだ。
ばくばくと鳴る心臓の音が聞こえてしまわないか不安になる。

並べて作ったパイプ椅子のベッドの上、横たわる彼の頭を支えているのは、椅子に座った私の膝だ。

（冗談だったんだけど……！？）

渡したタオルで身体を拭いて、補水液を飲んでもらったあと、横になれるようにパイプ椅子を並べたまでは良かった。

並べながらふと、あ、枕あったほうがいいですよね、どこかにタオルケットあったかなあ……私の膝ならあるんですけどね、なんて冗談めかして言った途端に、屈んで顔を覗き込まれて。

間近に迫った凜々しい顔に、膝ならあるんですか、と聞かれて……ないですとは言えずに、こんなことになってしまった。

「わ、私なんかの膝、寝心地、悪いの、では」

「いえ、すごく良いです。……重いですか？ 俺の頭」

「全然……！ ただ、ちょっと……は、恥ずかしいと言いますか……っ」

「……こういうの、あんまりしたことないですか？」

「ないですよ……！」

「そうなんですか、じゃあ……ラッキーですね、俺」

何がラッキーかよくわからないけど、とにかく今の状況を前向きに捉えているようなら良かったかもしれない。

そんなことを思いながらばたばたとうちわを扇いでいるうちに、お兄さんの顔色が良くなってきて安心する。少し眠たそうに瞬きを繰り返している様子を見ると、不意に視線が合って顔が熱くなった。

「……あの」

「は、はいっ、あっうちわ嫌でした!？」

「いえ、涼しいです。……あの、俺、笹島……笹島遼平って言うんですが」

ささじま、りょうへいさん。

突然推しから名前を教えるというイベントが発生して驚きつつも嚙み締めてい

ると、照れたように少し視線を逸らされた。

「……名前、教えてもらえませんか」

「へっ、あっ、私……私の名前ですか?! あ、えっと岡崎です、岡崎晴海っています」

「……晴海、さん」

「はっ、はい……り、遼平、さん……? どうしましたか……?」

名前で呼ばれるイベントも発生した……??

突然の供給量についていけない。名前を呼んでくれたのだから名前で返すべきかと思っ
て呼ばせて貰うと、熱を帯びた視線とかち合って心音が早まる。

「……こんなに優しいと、勘違いされませんか」

「へ、かつ、勘違い……?」

「俺のこと好きなんじゃ、とか。周りの男に勘違いされそうだな、って」

じっと見てくる薄いグレーの瞳が驚くほど真剣で、思わず、笑いを含んだ吐息が漏れて

しまった。

「ふっ、あはは！ やだなあ、私なんかそんな目で見てる人いませんよ、いつも皆にお母さんみたいだねーって言われちゃうんですから」

「お母さん？」

「そうですそうです、ほら、ポッケに飴とかいっぱい入れちゃってるし…あ、そうだ！ 塩飴も持ってたような…ちょっと待ってくださいねー」

皆にお菓子を配る癖があって、ポケットにいくつも飴を入れている。そういえば塩分補給用の飴もあったような、と思いながらスーツのポケットをあちこち探していると、ふと遼平さんが身じろぐ気配がした。

体勢を変えたかったかな、と思ったのだが、そういうわけではなかったようだ。床に落ちている、何か小さなメモを拾っている。

——待って。

まさか、それは。

「っ！？ 待、待ってください、それ……！」

「……………晴海さん、これって」

カサ、と紙の音がする。どう考えてもさっきの、梨花ちゃんが書いたメモだ。ポケットを漁る拍子に落ちてしまったらしい。

慌てて奪おうとするものの起き上がった遼平さんに掲げたまま読まれてしまつて全然手が届かない。恥ずかしくて顔から火が出そうだ。

「うわああ違うんです、か、返して下さい……！」

「……………配達、って……………もしかして俺のことですか、これ」

「違つ、……………わないですけど、わ、渡すつもりは、なくて……………！」

恥ずかしい。消えたい。なぜかメモを丁寧に折りたたんでいる遼平さんに、いたたまれない気持になつて俯いてしまう。

なんとかこの場をやり過ごそうと、少し震えながらも明るい声を出そうと努めた。

「……わ、私なんかこんな貰っても、迷惑ですよ。本当すみません、忘れてください
ね……！　そうだ、飴……っ」

「渡してくれたら、すぐ連絡したのに」

遼平さんが小さく呟く。そのまま振り向いて屈まれ、整った顔が目の前に迫る。

——え？　今、なんて。

「晴海さん。俺は、あなたのことをお母さんみたいなんて思ったこと、一度もないです。……
ずっと、”そんな目”で、見てましたよ」

「……へ……？」

じっと見つめられたまま、顎に指を添えられる。

状況を飲み込めずにぽかんとしていると、すぐそばに迫った遼平さんの目元がふっと和
らいで、かわいい、と囁く。

そのまま、スローモーションのように顔が近付いた。

「……ひゃ……っ!？」

——ちゅ……っ♡

柔らかい唇が自分の額に押し付けられて、驚きに身体が固まる。

顎を持っていた手がゆるやかに顔の輪郭を撫でて——その手の暖かさを感じているうちに、そっと唇が離れていく。

「ずっと……こうやって、キスしたり……触れたら、どんな顔するんだろうって思ってた」

「そ、……えっ、そんな、うそ……っ」

「嘘じゃないです。配達行くいつも笑顔で迎えてくれて、俺が車乗るまで見送ってくれて……いつも、癒されました。晴海さんも、俺のこといいなって思ってくれてたんですね……嬉しいです」

ようやく良くなってきた遼平さんの顔色がまたどこか熱っぽく染まっている。囁く声が

甘ったるくて、夢でも見ているみたいだ。

どうしたらいいかわからずに固まったままでいると、熱を帯びた手のひらが耳元を擦るように撫でて、くすぐったさにびくりと肩が震えた。

「ぐいぐい行ったら迷惑かなって思ってたんで、ずっと抑えてたんです。晴海さん、もっとキス、させてくれませんか……？」

「えっ、あ、……ん、う……っ！」

——ちゅ……っ♡

返事をする間もなく何度と唇を押し付けられて頭が真っ白になる。

今までずっと、こういうことには縁遠い人生で、彼氏はおろか、キスすらしたことがなくて……だからこれが、ファーストキスだ。

(夢みたい、こんな……憧れてた人に……っ)

「……目、とろけてますね……キス、好きですか？」

「へっ、あ……わ、わかな……ん、うう……っ♡」

ちゅ♡ はむ♡ れろ……♡

何度も繰り返される口付けに身体中が熱を帯びる。

無意識のまま、縋るものが欲しくて腰元の服を掴むと、唇を食んだまま嬉しそうに腰に腕を回された。

頭がふわふわとして、何も考えられなくなっていく。

「……キスだけで、そんな顔になっちゃうんですね。可愛い、誰にも見せたくないな……」
「……っや、あ、あんまり、見ないで下さい……っあ、え？」

甘く囁かれる言葉が恥ずかしくて離れようとする、ダメって言うみたいに逆に引き寄せられる。と、もう片手でそっと眼鏡を取られてしまった。

視界がぼやけて、間近に迫る遼平さんの顔だけが鮮明に見える。

「口、少しだけ開けてみて、晴海さん」

「ふえ……？ は、……っふ、うっ♡ んむ、うゝ……っ♡」

れる♡ ぢゆる♡ ぬるる……っ♡

言われた通りおずおずと唇を開くと、その瞬間に熱い舌が入り込んできて力が抜ける。驚いて引っ込みかける舌をすぐに取りられて、ぬるぬると絡ませられて、なぜだか腰にじくりとした熱が溜まる。

そうしているうちに衣擦れの音が響いて……上着を、脱がされてしまった。

「んう……あ、え……？ あ、あの……んむ、りよう、へいさん……う、うわぎ、なんで」
「……嫌ですか？ 晴海さんの声も顔も可愛くて、俺……もっと、触りたくなっちゃって」

眉を下げて伺うように聞かれて、ぐっと喉が詰まる。

嫌ではないというか、推しにそんなことを言われて嫌がれる訳がない。でも、こんなの初めてで、どうしたらいいかわからない。

「嫌……っていうか、私、どうしたらいいか……っ」

「……もしかして、あんまり慣れてないですか？ 嬉しいな……いいんですよ、何もしく
て。晴海さんは……俺に何されてるかだけ、感じて下さい」

熱い吐息と共に耳元で囁かれて、ぶるりと背筋が震えた。

何されてるか、なんて、そんなの意識してたら。そう思っていたら、ぶち、と音がして……
シャツのボタンが外されてしまった。

恥ずかしさで顔から火が出そうだ。

「……！？ あ、あの、これって……どこまで……っ」

「どこまでなら、許してくれますか？ 俺……あなたの身体の全部にキスしたいですよ」

ちゅう……♡

熱烈な言葉と共に、はだけた鎖骨に唇を押し付けられて、れろ♡ と舐められて身体が
震える。

全部って、そんなのって——ぐるぐると思考を巡らせているうちに、シャツのボタンを
外しきった遼平さんの手が後ろに回って、ぱちん、という音が響いた。

まって、ブラ、外された……？

「——！？ あっ、待っ……そんな、とこ……っ、は、恥ずかしいです……！」

「……本当だ、顔も体も真っ赤になっちゃいましたね。じゃあ、触るの、服の上からにしますね……？」

もにゅ♡ もにゅ♡

すりすり♡

あっさり外されたブラをおっぱいの上に乗せられて、服上から柔らかく揉まれてしまう。服の上からとか下からとか、そういう問題じゃない、って、言いたいのにな。

「っふ……うう……っ♡ も、もむの……や、っ♡」

「揉まれるの嫌ですか？ じゃあ、こうやってすりすり……って、触るだけにしますね……」

「……っ♡ んんっ……は、恥ずかし……っ」

「恥ずかしがり屋で可愛い、晴海さん……でも、ここはそうでもないみたいです。こうやって包んで、胸の横のとこ……すりすりしていると、ほら……」

ぶく……っ♡ と先っぽが、尖ってきてしまった。じっと見つめられ、恥ずかしさで頭がくらくらする。

もうやめてほしいのに、触る手つきが甘やかすみたいに優しく、撫でられる度にぞくぞくしてしまって……身を引くことができない。

「わかります？ ほら、ここ……晴海さんのおっぱいの、先っぽのところ……服の上から触ってるだけなのに、こっちも触って、って言ってるみたいに、尖ってきてる。ここも、触って欲しいんですよ……？」

「そんな、知ら、な……っあ、あっ！??♡ だめ、うあつ、ん、ん~~~~っ♡」

かり……♡

かりかり♡ すりすりすりっ♡

夏用の薄いシャツの上から、勃起してしまった乳首を爪先で引っ掛かれる。両方の乳首を何度もかりかり♡ かりかり♡ と往復されて恥ずかしい声が出てしまう。

「あまーい声、出てきましたね……？ 夢みたいだな、晴海さんのこんな姿見るなんて……いつも、あなたのこと考えながら一人でシてましたけど……想像よりずっと、エッチで可愛い。もっともっと、見せてくれませんか……？」

カリカリ♡ カリカリっ♡

きゅ♡ こりゅこりゅこりゅ♡

何度も引っ掻かれてますますぷっくりと膨らんでしまった乳首をつままれて、こりゅこりゅ♡ と捏ねられて頭に電流が走る。

（私の、こと、考えて……？ そんな、私……ご飯とか、行けたらいいなっていうだけで……こんなエッチなこと、考えたことなかったのに……っうう♡ 乳首こねられると、頭びりびりして……あ、あ♡ きゅってつままれたまま、先っぽ短い爪でいいじされるのだから、きもちいいので、頭いっぱいになっちゃう……っ♡）

「あ、うう、あっ♡ っっひ、ん……っ♡ それ、ばっかり……っあ♡ や、やめて、くださ……っ♡」

「つまんだ指から飛び出した先っぽのどこ、カリカリするの、やめてほしい？ 晴海さん……そんな顔してたら、逆効果ですよ。真っ赤な顔で甘い声出してやだやだってするの、唆られるだけです」

遼平さんの顔が、鼻先が触れてしまうほど間近に迫る。細められた目で射抜かれて喉がきゅう、と鳴った。

もう、逃げられない——そう思った瞬間に、ふわりと、身体が持ち上がった。

「へ……っ？」

身体を起こした遼平さんにいとも簡単に抱き上げられてしまった。筋肉で膨れた二の腕がしっかりと私の背中と膝裏を支えている。おかげで浮遊感はあるけれど怖くはない。

……いや、怖くないとかじゃなくて、え？

「ちょ、待つ、おおお、おろしてください……っ」

「晴海さん、さっきから腰揺れて……可愛いけど、パイプ椅子だと危ないですし。床は土

足なんで……ちょっと背中痛いかもしれないんですけど、こっちで」

丁寧な仕草でお尻からゆっくりと、資料室の広めの机に下ろされる。

さっきからエッチなことばかりされているのに、同じくらい大事にされているみたいな手つきに心臓が高鳴ってしまう。恥ずかしいし、いっそ申し訳なさすら募ってくる。

「わ、私なんか持ち上げるの重いでしょ……っ」

「私なんか、じゃないです。俺にとっては奇跡ですよ、本当に」

「へ……っ？」

「配達中にあなたに会えることが楽しみで、頑張ってたくらいなんです。だからこんな風に、晴海さんに触れられるの……奇跡みたいなんです」

覆い被さってきた遼平さんが、それに、ちっとも重くないですよ、と囁く。

真摯な視線を向けられて、何も言い返せずにいると、またキスをされて目元がとろけた。

「ん……っ、……き、奇跡みたいって、私の方が思ってますよ……！ 憧れの人、だったの

で」

「懂れって、俺が……？」

「そうです……ずっと、格好いいな、って思ってたから……」

「……嬉しい、晴海さん」

鼻先が触れ合ったままの距離感で囁かれて胸が高鳴る。こんな、夢みたいなことあるんだ……と思っていたら、する……と、スカートの縁に手を掛けられて捲り上げられてしまった。

——そうだ私、押し倒されてるんだった……!？

「あつ、えっ？　だっだめ、スカート捲っちゃ……っ」

「こっちも、触りたいです……晴海さん。ダメですか……？」

「……っさ、触るって……ど、どこまで……っ」

「……最後までは、しないんで。もう少しだけ……」

「さいい、って、……っ!　ひ、……っ♡」

ちゅ♡

すりすり♡ すり…っ♡

はだけた胸元にキスされながら、太ももを割り開かれて、足の付け根をゆるやかに辿られる。

最後までじゃないならどこまでなのか、という疑問が口から出てくる前に、下着越しのおまんこを、形を確かめるみたいに撫でられてしまった。

「すごい、晴海さんのここ、熱くなってる……俺に胸いじられて、気持ちよくなってくれたんですね……？」

「い、言わないで下さ……っひ、あっ♡ 遼平さっ、だめ、だめえ、そこ……ん、んっっ♡」

すりすり♡ くにくに♡

カリカリカリ♡♡

何度かおまんこの筋をなぞられて、それだけでもぞくぞくしてしまうのに目ざとく一番弱いところを探られてしまった。爪先で柔く引っ搔かれて背筋が仰け反る。

「ちょっと撫でただけでこんなに身体びくびくしちゃうんですね、やっぱり机に来て貰って良かった。ここ……布越しでもわかるくらい、ぴん……っ♡ って勃っちゃってますよ。触って欲しそうにしているの、可愛い……」

「か、かわいく、な……あ、あ、あ♡ うう……やつ、それ、むりい……っ♡」

カリカリカリ♡

くりくり♡ すりすりすり♡

激しくされてるわけじゃない。むしろ優しすぎるくらいの刺激で、何度となくクリトリスを握ねられてはしたない声が止まらない。恥ずかしすぎるのに、気持ちいい気持ちいいって、媚びるみたいに腰が揺れてしまう。

「そんなに腰かくかく揺らして……クリ好きなんですネ？ いっぱい触らせて下さい、俺、晴海さんが気持ち良くなってるそこ、ずっと見てたいです……」

「ぎっ、ああ♡ んあっ♡ も、やだあ、見ないで、くださ……っ♡」

「ふ……、腰浮かせておまんこ見て見てっ……ってしてるのに？ 目でも瞑らない限り、見え

ちやいますよ……ああ、パンツ濡れてきちゃってる」

ぬりゅ♡ すりゅすりゅ♡

こりゅこりゅこりゅ……♡

滲んでしまった愛液を掬ってクリトリスにぬりゅぬりゅ♡ 塗り付けられて頭に火花が散る。

（だめ♡ だめこれ♡ こんなちょっと、撫でられてるだけなのに……♡ じぶんですのと全然違って、遼平さんの指きもちよすぎて、訳わかんない♡ どうしよ、このままされたらすぐ、イっちゃう……っ♡）

「んん、つく、ううっ♡ ……っ♡ ふー……っ、ふー……っ♡」

「……晴海さん、何かこらえてます？ これ……クリに愛液塗り付けてすりすりするの、強すぎますか……？」

「っっうう♡ ち、が……、んあっ♡ やめ、待っ、ああっ♡」

「違うんですね？ じゃあ、こらえないで。ずっとこのまま、俺の指で顔真っ赤にして息荒

くして、気持ち良くなってるところ、見せてください」

ちゅくちゅく♡

ぬりゅぬりゅぬりゅ♡

イきそうだからって言いたいのにさっきよりも指を早く動かされて、恥ずかしいことばかり囁かれて、情けない喘ぎ声しか出てこない。

「ひっ、うっ、うぐ♡ ふうう……っも、だめ、ゆび……い、イっぢゃう、から……っ♡」

「ああ、イきそうだったんですね……嬉しいな……。晴海さん、俺の指でクリいじられてイくところ、見せてくれるんですね」

（布越しに、やさしくカリカリってされてるだけ、なのに♡ 恥ずかしいこと言われて、どんどん気持ちいいの腰にたまって、あ、あ♡ だめ、勝手に腰、ういて♡ イく準備、はじめちゃってる……っ♡♡）

「そんなに腰浮かせて、イきそうなおまんこ丸見えで本当に可愛い……ああ、濡れて入り口

ひくひくしちゃってんの透けてますよ、エロすぎ……」

「やつ、見ちゃ、やあ、ああっ♡ だめえ、も、も、イク、イっちゃ……っ♡」

「晴海さん、俺のこと見て。誰の指でイクんですか？」

「っ♡ ～りよ、へい、さん……あっ♡ イく、遼平さんの、ゆびでえ♡ イ、っちゃ
う……っ♡♡♡」

びくびくびくっ♡

熱っぽく絡む視線に押し上げられるように強い絶頂感に襲われて、腰が何度も甘く跳ねる。

ぷちゅ、くちゅっ♡ と恥ずかしい音が鳴って、もうとろとろになってしまったパンツからまた愛液が滲む。

——イって、しまった……♡

「はあ、晴海さん、可愛い……俺の指で、イってくれたんですね。ああ、パンツぐちよぐちよになっちゃったな……」

「はっ……ふ……っふあ、！？ だっ、も……駄目です、ほんとに、だめ、パンツとっちゃ……っ

ひゃ、」

まだ息が荒い中でパンツをずり下げられて、慌てて机から身体をずらして立ち上がろうとする。が、思ったより足ががくがくでよろめいてしまった。すぐに遼平さんの腕が腰に回って支えてくれる。

あまりの安定感に、状況も忘れてほっとした。

「あえ……っ？ あ、えっと、ありがとうございます……っ？」

「危ないから、こうして支えてますね。ほら、晴海さん、パンツももうぐちよぐちよだから、脱いだ方がいいです、足上げて……っ？」

「えっ、そん、そんな……っあ、だめ、」

机の前、跪いた遼平さんに足を掴まれて簡単にパンツを取られてしまった。

もう終わりに思ってた立ち上がったのに、シャツのボタンは外され、スカートはたくし上げられて、下半身は丸見えになってしまっている。

それだけでも火が出るくらい恥ずかしいのに、その前に遼平さんが膝について……私の

おまんこを、見つめている。

(なにこれ、なんで、こんな……立ったまま、おまんこ、下から見られて……へ、変態みたいな……っ)

耐えがたいほど恥ずかしいのに、太ももをがちりと抱き込まれてしまつて身体がぴくりとも動かない。

イったばかりのおまんこを、熱っぽい目で見つめていた遼平さんが口を開く。

「……晴海さん、俺……まだ喉が渴いてて」

「へっ？」

「水分補給、させてくれませんか……？」

「はっ、えっ？ 待つ、なに……っあ、あああ……っ！??♡」

れろお……っ♡

はむ♡ ちゅっ♡ ちゅるるる……っ♡

まさかとは思ったけれど、そのまさかだった。濡れきったおまんこに口をつけて、クリトリスを舐め上げられ、甘く吸われる。あまりの快感に机に手をつく、立ったまま遼平さんの口におまんこだけを押し付けているみたいな体勢になってしまった。

「ん、ちゅ……っ、……晴海さんのまんこ美味しい、とろっところですね……俺の指でこんなになってくれたの嬉しいな……。口でも感じてくれますか……？」

「は、ああ♡ ひっ♡ だめ、らめ、りよ、へいさ……わたひ、いった、ばっかりで、ええ♡ ~~~っ♡♡♡」

ちゅ♡♡ ちゅっ♡♡

ちゅぽっ♡ れろれろれろ♡

甘やかすみたいにクリトリスを舐めしゃぶられてひしゃげた声しか出てこない。まだ敏感なそこはぬるついて柔らかな舌の刺激を過剰に受け止めてしまって、気持ち良すぎてっらいほどだ。

(むりっ♡ こんなのむり、知らない♡ そんなにおまんこちゅうちゅう吸ったらダメな

「は、あつ、あつ♡ りょうへい、さあん♡ わたひ、また、ああ♡ ぎちゃう♡♡」
「ん、またイケそうですか……？ いいですよ、立ったまま俺にまんこ舐められてガチイキ
するとこ、見せてください……♡」

ちゅぽ♡ ちゅぽ♡

れる♡ あむ♡ くりくりくり♡

イケイケ♡ って言うみたいに吸われたクリトリスを舌先で転がされる。

きもちいい。もう耐えることができない。はしたなく腰をかくかく振って、遼平さんの
口にクリトリスを擦り付けるのを止めることすら、もうできない。

もう、今は、おまんこ舐められながらいくことしか、できない。

「あ♡ あ♡ あ♡ だ、めっ、またイぐ、あっ！？♡ あっだめ、なに、いく、でちゃ、
でちゃうっ、~~~~っああ……っ♡♡」

びくん♡ ぷしゃあ♡

びくびくびく……♡♡

二度目の長い絶頂に、ぶる、ぶる、と身体が震える。それと共に、出ってしまった。どうしよう、おしっこ漏らしちゃった——と青ざめて下を見た瞬間。ごくっ……と太い喉の、鳴る音がした。

「は……え……っ？ な、なに、どうして、」

「……っは、晴海さんのイキ潮、美味しい……あ、潮吹き初めてでした？ 俺、初めて貰えたんですね、嬉しい……」

せっかく拭いた顔が、私が出してしまったらしい潮でまた濡れている。

ありがとうございました、と場違いな礼と共に慈しむようにお腹にキスをされて、ようやく解放された。

——力が入らなくて、ぺたりと床に座り込んでしまう。

「晴海さん、力抜けちゃいましたか……、……っ!？」

「……っ、……」

「晴海さん？ ——晴海さん、ごめんなさい。嫌でしたか、怖かったですか、」

ぐず、と鼻が鳴る。

処理しきれない情報量にじわりと涙が滲んでしまった。堪えきれない鳴咽と共に、首を振りながら手を伸ばすと、慌てた様子の遼平さんが包むようにぎゅっと抱きしめてくれた。何度も何度も、ごめんなさい、と謝られて、その度に首を振る。

——少しの時間ではあったけれど、遼平さんは私が落ち着くまで、ずっと謝りながら頭を撫でてくれた。

「っ……すみません、落ち着きました。私……お恥ずかしながら、……初めてだったんです。キスも、こういうことも……」

「……キスも、ですか……？　うわ、俺……ごめんなさい、知らずに奪って……」

「いえ、ちょっとびっくりしちゃっただけで。私をもっと慣れてたら、良かったんですけど……こういうことって、何回か、デートした後とかにするものなのかと……」

社会人になって随分経つのに、うら若き乙女みたいなことを言ってしまうている気がし

て、じわじわと恥ずかしくなってきた。

もう大丈夫ですから、と笑おうとして顔を上げる。

と——さっきよりもずっと、青ざめた遼平さんの顔が見えた。

「本当にすみません……俺、メモ見て……舞い上がって、調子乗ってしまったて」

「め、メモ……！　そ、そうですね……すみません、あの……実はあれ、私が書いたものじゃなくて」

「えっ」

「同僚の子が、良かれと思って書いてくれて。で、でも！　私が、遼平さんのことを気になってたのとか、ご飯行きたいな、って思ってたのは、ほ、本当ですから……！」

確かに、あれを見たらまさかキスすら初めてだとは思わないかもしれない。

ますます青ざめる遼平さんに、慌てて恥ずかしさを堪えながら本音を伝えると——そつと手を重ねられた。

真摯な視線と共に、掠れた声が響く。

「……本当に。すみませんでした。あの、俺……晴海さんのこと、身体目当てとかじゃないです。もう絶対、こんな無理やりみたいなことしません。初めて奪った責任、取りたいので……デートから、やり直させてくれませんか……？」

その言葉に。

先ほどまでの混乱がストンと落ち着いたような、そんな気がした。

——やっぱり、格好いい。

真面目で実直で、アイドルなんかよりよっぽど素敵な、私の憧れの人だ。

そう思いながらぎゅっと手を握って、はい、私で良ければお願いします——と、頷いた。

それから何度デートをしても。

本当に、遼平さんは一切、手を出してくることはなかった。